

---

# 極限の息子

ゼロす

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

極限の息子

### 【Nコード】

N0139Y

### 【作者名】

ゼロす

### 【あらすじ】

白蘭との死闘から二十数年後、ボンゴレファミリーによりほぼすべてのマフィアは統一されていた。その裏には一人の男の存在があった。笹川了平の息子、笹川了我。ボンゴレ10代目の晴れの守護者である亡くなった父の代わりとしてボンゴレを支えていた。そんなある日ボンゴレを震撼させる事件が発生する。スカル、コロネロ、マーモン、そしてリボンといったアルコバレーノの度重なる失踪。そのため人手不足のボンゴレは了我に一人でボンゴレの秘宝がある美術館の警備をまかせる。何事もなく終わると思った。しかし、事

件は起こる。美術館に現れる謎の男。男は言った「彼女の本当の姿。知りたくはないか？」男の力によって気を失い、気づいたら電車の中。そして我は“魔法”を使う者達に遭遇する。男の正体は？彼女の本当の姿とは？我の過去の記憶と管理局の闇がつながるとき。我は答えに辿り着く。家庭教師ヒットマンREBORN！と魔法少女リリカルなのはStrikerSのクロスが始まる。

## 夢の終わり

彼女と会った日は昨日のように思い出せる。

彼女は何時も笑っていた

決して弱音は吐かなかった。

誰よりもつらいはずなのに。

多くの人の心に土足で踏み込み

多くの人の心を救った

誰よりも不幸なはずなのに

不思議だった

なぜ？何故そんな風に笑える

彼女は笑って言った

笑ったほうが楽しいだろ？

まるで男のような口調で

だからだろうか？

そんな彼女だから

決して光を失わない瞳だから

彼女は私にないものを持っていた

『私は彼女を好きになった』

一面が真っ白な雪の世界で白髪の少年がいた。その手は血まみれだった。

少年の手の中には短髪の血まみれの少女がいた。やすらかな顔で、微笑んでいた。

「すまない、私のせいだ……私が君を……」

少年の独白はむなしく空に響く。

少女は残った力を振り絞り少年の頬に震える手を添えた。

「……………」

少女の声は小さく聞こえるものではなかったが少年には口の動きで何を言っているのか理解できた。

少年は彼女の手をとりぎこちない笑みで笑った。

その瞬間少年の瞳からは涙が落ち少女の額に当たった。

少女は満足そうに笑いながらまぶたを閉じ、眠りについた。

二度と覚めることのない眠りに

少年は泣かない。ただ腕の中にいる愛おしい人を抱きしめ続けていた。

真っ白な世界。白以外の色を許さない世界で少年と少女はどこまでも赤く染まっていた。

罪ある手には散った花

夢の終わりはどこまでも儂い

## 帰還

一人の男がある喫茶店に座っていた。

笹川了我。

彼はフランスの“シャルモーラファミリー”の反乱を抑え、また中国系マフィアである“蛇華”との同盟を結び、約一年ぶりに日本へと帰ってきていた。

そんな彼が何故いきなり喫茶店にいるか？それは日本に帰って来たときだった。



八月九日

私は約一年ぶりに日本の地へ帰ってきた。

空港ロビーは外の暑さのせいか今まで飛行機の中にいた私には少し肌寒い。平日のため人はそう多くはないが肌をさすっている光景が所々で見られた。

思えばこの一年間はなかなか密度の濃いものだった。

フランスについた途端に暗殺者に身を狙われ、ついたボンゴレの基地の半分以上の人は霧の幻術にかかっていて戦闘になるなど映画にしたら丸々二本分にはなる自信はある。

………すげー泣けてくる

しかし、皆さんは元気にしてるだろうか？ランボさんなんかイーピンさんに女の子を口説いて叱られてる光景しか浮かばない。

「了我！！！こつちだ。」

物思いにふけっていると後ろから私を呼ぶ声がした。

おかしい？出迎えは山本さんのはず。あの方は私を呼ぶときは了と  
呼ぶはずだ。

疑問に思いながら振り向くとそこには驚きの人物がいた。

「オジキ！！なんでこちらに！？」

そう、振り向いた先には変わらない優しい瞳を向けてくるボンゴレ  
十代目沢田綱吉、つまり私の叔父がいた。

-----  
久しぶりに会った甥っ子は一年の間でより一層遅しくなっていた。

遠目から見ただけでもその姿はかなり目立つものだった。

180から190はある身長にしっかりとした筋肉質な体。そしてお兄さん譲りの白い短髪。堂々としているからか着こなしている黒いスーツからは凛々しさが見てとれる。こういう所は師匠であるランチアさんに似たのかもしれない。

「どつして、またオジキがこちらに？山本さんがいらっしやるのでは？」

……やっぱりこういう所はお兄さんの子供とは思えない。やはり母譲りなのだろう。

-----

二十年近く前のことだ。お兄さんはボクシングの試合があったときがあった。

大会のためお兄さんはロードワークしてくると言って二週間帰ってこなかった。そして帰ってきたとき彼の母親シエルファさん連れられてきて一言。

『極限に結婚するぞー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』

……………いろいろおかしかったので話を聞いてみると

アラスカまでロードワークに行ったお兄さん。(この時点でかなりおかしい)

しかし、5日間何も食べていなかった+熊&大鷲との戦闘これもおかしいでダウンしてしまっらしい。

そんなとき偶々通りかかったシエルファさんに助けられシエルファさんの家に。

そして起きてシエルファさんを見て

『き、極限に結婚してくれ————!!————!!』

『あら？いいですよ。』

……………最早、どっちもおかしいからつっこまない。

そんなこんなで1ヶ月も経たない内に婚約、結婚、挙式。そして半年後には子供が出来たことも発覚。

そんな2人の結婚式ですつと乾いた笑みを浮かべていたのを今でも覚えている。

――

どうしてあの二人から了我みたいな子供が出来たのだろうか？

人生極限プロボクサー＋天然のほほん年上お姉さん〃礼儀正しい甥  
っ子

わからない、やはり人は環境なのだろうか？

「……………キ、……………ジキ……………オジキ？どうなさったんです  
か？」

ふと、我に返ると了我が俺を怪訝そうな表情で見つめていた。母親  
からの遺伝である灰色の瞳で。

「ああ、すまない。考え事をしていてな。」

少し適当な感じはするが笑顔で返事をしておく。

「考え事？大丈夫なんですか？」

自分でも本当に気の利く甥っ子だと思う。実際俺は了我を信頼し一時は門外顧問、つまりボンゴレファミリーのNo.2にしようと思っただこともある。しかし、息子の吉宗を旅に出させた了我を門外顧問に据えるのはどうかと思いき考え直したのだ。

しかし実際に了我の働きは目覚ましく、フランスの“四強”の一つのシャルモーラファミリーを“単独”で壊滅。また中国を拠点としアジアを中心に活動している構成員20000人抱える蛇華との同盟

武力、知力ともにありファミリーの仲間全てから（雲雀さんはしらないけど……）好かれいる了我なら相應しい。そう思ったのも事実

だ。

了我はめげない信念と魂を持っている。だからこそマフィアに向かない。俺と同じ道じゃなくてもいいと思う。

しかし、今日の俺はボンゴレ十代目として晴れの守護者である了我に話をしに来たのだ。

重要な事件を伝えるに……………

—————



ずっと黙っているオジキを見て不思議に思っていると

「了我、今日は話があつて来た。」

オジキの目が真剣になり表情が引き締まる。何時ものではない“マ  
ファイア”の顔に。

一体、何があつたんだろうか？優しいオジキをこんな顔にすること。  
それは驚愕のことだった。

「スカル、マーモン、コロネロ、そして……リポーンが居なくな  
った。」

突然のアルコバレーノの失踪。この時から事件は動き出した。

止まらない時の歯車。

噛み合わなければそれは不協和音を奏でる。

## アルコバレーノ

き、気まずい……………

喫茶店には平日のため多くの客はいなかったがチラチラと人が見え  
たがみんながこちらを見ている。

それはきつとオジキのイケメンさのせい。

この方は無言ならばかなーりのイケメン。優しそうな顔や穏やかな  
雰囲気は草食系男子を彷彿とさせる。そして現在はスーツ姿で  
きる男のオーラを惜しげもなく出している。

結論は「あの、チヨーイケメン誰よ?」「ということ。

居づらい……。慣れたつもりだったけど慣れない。

てゆーか、何でうちのファミリーはイケメンしかないんだ!!私の胃がストレスでマッハで死にそうだよ。

そんな風を感じているとオジキが話を切り出してきた。

「三ヶ月前のことだった。ある日、リポーンが突然いなくなったんだ。京子や母さんに聞いてもどこに行ったか知らないって言うし、そのときはまた何かを見に行ったかと思っただが……。」

確かにその通りだ。リボーンさんはたまにふらっと出かける癖がある。

私を知っている最新の事件は確かマチュピチュにコーヒーを飲みに行ったとか……

日本でもよくな？

「それから一ヶ月経つても一切の連絡がなかったんだ。不思議に思ってた。調べてみたんだがそこでカルカツファミリーの軍師であり、雲のアルコバレーノスカルが半年前にいなくなっていたことがわかった。」

スカルさん……

失礼だがすごい小物っぽい。RPGの最初にやられる小ボスみたいな。リボーンさんにケンカを売るけどすぐに絞められる。ちなみにカルカツファミリーの軍師。決して悪人ではないのだがな……

「調べていくと五ヶ月前にはヴァリアーからはマーモン、四ヶ月前にはチュデフからコロネロがいなくなったことがわかったんだ。」

特殊暗殺部隊ヴァリアー。XANXUSを中心としたボンゴレの独立暗殺部隊。主にXANXUS、スクアード、ルツスーリア、ベルフェゴール、レヴィ、そしてアルコバレーノのマーモンが中心となり活動している。

そして基本みなさん絡みづらい。

昔、修行として数ヶ月行つたが初日で帰りたくなつた。

そしてもう一つチュデフ。正式名称は「Consulenza Esterina Della Famiglia」。通称・門外顧問チーム。普段はファミリーに所属しないが、非常時にはボスに次ぐ権利を持つ実質上No.2の門外顧問が率いる組織だ。主に諜報活動をを行い、所属するメンバーの多くは香辛料の名前からとられている。またそれらは全て本名ではなくコードネームでもある。俺も昔はカルダモンを名乗っていた時期がある。

みなさんいい人で私も世話になった。

コロネロさんのしごきは死にたくなっただけど……

エベレストにパンツ一丁で放り出されたりゴビ砂漠に水筒一つで生き抜けと言われジャンニーニの作った転送装置に入れられたり……

あれ？目から汗という名前の水が……

てゆうか、ラルさんとイチヤイチャすんじゃねーよ！！！！何回あんなのコーラに毒盛ってやるーと思ったことか。

「だから了我。お前に頼みたいことがある。」

ここまで来たらやることは一つしかない。

「わかってます。他のアルコバレーノの警備でしょ？」

「いや、違う。」

「ちやうんかい！！まじで椅子からこけそつになったぞ！！」

「お前にはここの警備をしてもらいたい。」

オジキが出したのは一枚のチラシ。

「波川春三の遺品コレクション展？あのおっさん死んだんですか？」

波川春三

並盛町きつての富豪。並盛での権力はあの雲雀さんと同じくらいあるかもしれない。

容姿はハゲた髭面のおっさんで笑うときに歯が全て金の典型的な超金持ち。



「何で私がここの警備を？」

疑問だ。何故に？

「実はそこには一つ重要なボンゴレの宝がある。」

「宝？いったい何の宝ですか？」

「裏を見ってみる。」

私は素直にチラシを裏返すと映っていたのは

「虹色のアサリ貝？」

そう、そこに映っていたのは虹色に光輝く手のひらサイズのアサリ貝だ。

アサリ貝とはボンゴレを表すもの。

貝のように姿を変えることない縦の時空軸（過去から未来への継承）を象徴としている。

昔、大空のアルコバレーノのユニさんがそんなことを言っていた気がする。

美人で優しくて………さん、いやあのロリコンめ………マキシマムキャンオンで打ち抜いてやりたいです。

「それは“夢のアサリ”と言われているものだ。そして、ボンゴレの秘宝でもある。」

「秘宝？一体どういう代物なんですか？」

疑問に思っ。

秘宝と呼ばれるものなら何故こんな美術館で展示されることが決まっている？しかも何年もボンゴレにいるが“夢のアサリ”なんて聞いたこともない。

「ああ。その通りだ。俺も最近まで知らなかったからな。だが、まずそれを話すにはボンゴレの歴史を知らなきゃいけない。」

ボンゴレの歴史？ますます理解ができない。

「ボンゴレファミリーは元々自警団だったことは知っているな？」

それは有名なことだ。イタリアの街に住んでいたボンゴレ？世が力のない弱い人達を守るため結成されたのがボンゴレファミリーの始まりだ。ボンゴレに所属するものならみんな知っている。

「そして、ボンゴレは約百年続くほどの歴史と伝統を持つ。その理由は……………」

「ボンゴレリング、ですね。」

私はそう言い、右手にある晴れのボンゴレリングを見せる。現在は晴のバンブルVer.Xからボンゴレリングと我流に戻している。

「その通りだ。」

オジキは微笑みながら頷く。

「ボンゴレが長く続く理由はボスや守護者などが優秀なのもあるが最大の理由はボンゴレリングが73（トゥリニセット）の一つとして絶大な力を誇っているからだ。」

73

ボンゴレの技術者の三羽鳥の一人、入江さん曰わく73の原石こそがこの世界を創造した礎だと言われているらしい。

「先ほど見せた“夢のアサリ”はおそらく73の原石から出来てい

る。」

「なっ……………、73から!!!」

そんなものが存在するのか!?!?

「ああ、間違いない。先日、ユニに写真で確認してもらったところ  
自分のおしゃぶりと同じものを感じたそうだ。」

「形はどうあれ、73は強大な力だ。一般の人が持って被害が及ぶ  
と困る。」

「了我。お前にしてもらったことは二つある。一つはこれの警備だ。  
他の守護者のみんなはどちらかというと警備には向いていないから  
な。」

そう言つとオジキは苦笑を浮かべる。

なるほどな、だから私が選ばれたのか。

「当然ですね。私も美術館で『果てる——！——！』とかやられても困ります。」

やりそうで怖いよ、あの人。

「二つ目は“夢のアサリ”の持ち主、春川波三の息子さんである春川時臣さんに美術展が終了次第、すぐに事情を説明してこれをイタリアのボンゴレ本部に持って帰ることだ。」

その時ふと、疑問に思った。

「なんで、美術展が終わってからなんですか？すぐにでも事情を説明し、回収すべきでは？」

73から出来ているのなら、力は未知数。危険すぎるのだ。

「それはチラシを見たらわかるかもしれないが、それは美術展の言わば目玉だ。いくら危険だとはいえ無理やり持ち去ったら春川の名に傷をつけることにも繋がる。そんなことは出来ない。」

……………なんともオジキらしい理由だ……………。

ま、だからみんなから慕われるんだけど。

「頼んだぞ。了我。」

真面目な顔で私に頼んでくるオジキ。

とりあえずはオジキの期待には答えたい。頑張りましょうか。

しかし、事情は把握できたが問題は……

『消えたアルコバレーノのが何処にいるのか？なんで消えたのか？』

『

偶然？あり得ない。四人も一変には消えない。

アルコバレーノを集めることが目的か？

それともただおしゃぶりが欲しいのか。



もしくは別の何かが……………？

わからない。しかし、考えても仕方ない。とりあえず前に進む。それが のやり方だった。なら、進もう。答えがでなくとも。暗闇の道だろうと。

“運命は回り始めた。しかし、それはカウントダウンへの幕開け。生か死か選ぶがいい、友よ。君の選択が世界を変える”

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0139y/>

---

極限の息子

2011年12月11日00時57分発行